



2015年(平成27年)

6月号(No. 841)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

ネパール大地震・現地からの報告	1
国際山岳会議(集会)に参加・発表	4
JAPANESE ALPINE NEWS -Vol.16 2015	6
回想—ジャパニーズ・アルパイン・ニュース	7
[山の日に向けて] 山を考える②	
日本の山の野生動物	8
創立110周年記念事業	
日本三百名山登頂シリーズ①報告	9
創立百十周年記念事業	
日本三百名山登頂シリーズ③	10
支部だより	10
越後支部	
図書紹介	12
Climbing&Medicine	68
図書受入報告	16
会務報告	16
新入会員	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	19
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10~20時
水・金……………13~20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10~18時

ネパール大地震・現地からの報告

4月25日の大地震から1ヶ月半、カトマンズでツアー会社を営んでおられる大津昭宣会員から最新のレポートをお送りいただいた。今後、我々登山者に何ができるのか、ともに考えてみたい。

大津昭宣

方約80km

ヒマラヤが地震の頻度の高い地域であることは専門家が指摘しており、"Seismic prone zone"として研究が進んでいる。カトマンズがマグニチュード7を超える地震を経験したのは1934年のマグニチュード8・4以来であるが、この間、ヒマラヤやその山麓はかなりの頻度で地震が起きている。

この報告は6月5日現在である。

1・地震の発生

発生日時…2015年4月25日午前11時55分ごろ
震源地…ゴルカ(カトマンズの西

発生状況…震央を中心にネパール全土および周辺国に大きな揺れが観測された

マグニチュード…震央(ゴルカ)7・8 / カトマンズ7・3

2・5月12日の余震

発生日時…2015年5月12日午後12時50分

震源地…シンヅパルチョックとゴルカの間(カトマンズの北東約70km)

発生状況…カトマンズを含め大きな揺れが観測された
マグニチュード…震央7・3 / カ

トマンズ6・8

以上は、いずれもUSGS(米国地質研究所)の発表による。

3・被害状況

*山間部などの状況が次第に明らかになりつつあり、数値的な発表は刻々変わるため正確ではない。

家屋全壊…約46万棟

家屋半壊…不明

死者…約8900名(邦人1名、中国エベレスト隊に参加)

負傷者…不明

*トレッキング・コースを除く主な被災地の被害状況

①シンヅパルチョック

カトマンズの北東約20kmに位置するこの地域は最も被害が大きかった。4月29日と5月12日の余震はいずれもマグニチュード7を超える、3323名の死者と約7万棟

に近い家屋が全壊した。カトマンズから近く、アクセスも容易なことから救援、復旧は進んでいるが、すべての政府機関の建物が全壊しているため、行政もままならぬようである。557の学校と57の診療所も全壊している。

②ゴルカ

5月12日の震央であるこの地方はネパールの旧都で、シャハ王朝の発祥の地としていまでも訪れる人が多い。丘陵地帯であるため、今後の土砂崩れが心配される。約7万棟の家屋倒壊と500名を超える死者が出た。

③カトマンズ盆地

カトマンズは旧王宮を中心とする旧市街が大きな被害地域である。約1300名の死者と5万棟を超える家屋が全壊した。バクタプー

ル、パタンも同様で、旧市街や世界遺産に登録されている建物の多くが全壊、半壊している。

*トレッキング・コースの被害状況

①エベレスト街道

エベレストBCは別に述べるが、ルクラ―ナムチェ・バザール間は土砂崩れ、落石が多く、若干危険はあるが道路状況は悪くない。ナムチェより上部の村々も大きな被害は見られない。

②アンナプルナ街道

アンナプルナ北面を周回するルートも含め、特段危険は認められない。

③ランタン谷

今回最も壊滅的被害を受けた地域である。ランタン村、キャンジン・ゴンパなどほとんどの村が土砂と雪崩で埋まってしまい、現在でも救出作業が続けられている。

警察によると300名以上の村人と110名を超す外国人トレッカーが行方不明となっている。トリシリ・バザールからシャブルベンシに向かう道は、ネパール軍による復旧工事が進んでいるが、しばらくの間、トレッキングは難しいとされる。

④ドルカ地方



バクタブル・ファシデガ寺院の崩壊した参道

カトマンズの北東約80kmのこの地方は、ロールワリン方面へのトレッキング、登山で人気の地域である。40年以上前、スイス政府が建設した山岳道路の中間点・チャリコットから北に向かうのがドルカ地方である。

被害のほとんどは地震による土砂崩れで、この地域の11の村で全く消息がなく、捜索が続いている。

⑤マナスル街道

アルガート・バザールはすべてのロッジでなんらかのダメージが出ており、営業はできていない。19軒の内辛うじて1軒に宿泊させてもらえたとのこと。修理には1ヶ月以上かかるとのことだが、秋シーズンには営業再開できるとの見

通しという。

ソティ・コーラは3軒のロッジすべてがダメージを受け、建て替えるの必要があり、現在は宿泊不可。

アルガート・バザール―ソティ・コーラ間は、車が走れる道路が修復できている。

ソティ・コーラ―マチャ・コーラ間の徒歩道路も、現在は確保できていない。政府では新ルートでの道路を検討中とのことだが、雨期明けの土砂崩れなどを見極めてからの工事が予定されている。道路が開通しても当分の間、ソティ・コーラ―マチャ・コーラ間はテント泊になる。食料や飲み水も現在は入手困難で、入手できても非常に割高という。

⑥エベレスト

今シーズンのエベレストには358名、42隊に登山許可が出されていた。地震による雪崩がBCを襲い、18名の登山者が死亡したが、ルートが破壊されたため登山は中止となった。ルートワークを請け負っているSPCCが、クレバス帯が不安定で危険と判断したもの。観光省は登山許可の1年延長などの条件を正式に発表する。同時に118名、12隊のローツ

エ隊、34名、4隊のヌプツエ隊にも同様の措置がとられる。

4・復旧作業

復旧作業はネパール軍、警察が行なっており、各国からの救援部隊はすべて帰国した。

*カトマンズ盆地

全壊、半壊した建物の取り壊し作業が続いているが近年、10階を超す高層ビルが多いため、クレーンなどの重機が不足していることと、隣接ビルへの影響が大きいため作業は難航している。盆地全体で現在までに約6万棟が取り壊されている。撤去作業をうけて政府は7月15日まで、2階建て以上の建物の新築を禁止した。この間、地方開発省、カトマンズ市当局は合同で新建築基準法を策定、旧市街の防災都市化を計画している。

*その他の地域

高層ビルがないので取り壊し作業は比較的容易であるが、斜面に建てられた家屋が多いため、土砂崩れなどの二次災害を避ける立ち退き作業が続いている。

5・避難所

避難所は主にテント、タープ、木材とタン板を組み合わせた小屋、防水シートの組み合わせである。

カトマンズ盆地ではテント、タープが多く山村では木材を使った避難小屋も多く見られる。正確な数字ではないが、いまでもカトマンズ盆地では、数万人を超える被災者がテント生活をしている。

6・二次災害

6月も中旬を過ぎると、9月半ばまで続く雨季となる。測候所の予測では本年の雨季は雨量が少なくとしているが、地震で地盤が緩んでいることと、丘陵地帯、山間部が被災地に多いことから、土砂崩れの可能性を指摘している。

被災地ではないが、カトマンズとインドを結ぶ幹線道路は山肌を通過する箇所が多く、土砂崩れの危険性が高い。この道路が封鎖されるとカトマンズ盆地は孤立することになる。

7・復興への道筋

*PDNA

政府はPDNA (Post Disaster Needs Assessment 復興作業策定) を立ち上げて被害検証を行ない、復興のスキーム作り、データ作りを行なっている。現在23チームが被災地などで調査している。PDNAチームは6月15日までに調査報告を作成する。

*スケジュール

PDNAの報告により6月25日にはカトマンズで援助国、世界銀行、アジア開発銀行が合同会議を開催し、復興への手順を決める。一方、併行して7月8日までに復興予算を策定し、7月17日から始まる国家予算に復興事業費として盛り込むことになる。なお、9月中旬には進捗状況を確認するため、フォローアップ会議が予定されている。

8・復興資金

緊急援助とは別枠で多くの国、機関が復興援助を申し出ている。被害総額はPDNAの検証を待たねばならないが、ネパール国家GDPの25〜50%と見込まれている。復興の強力なパートナーである日本も会議において、“There should be earthquake resilient city planning”を提案している。

9・援助物資や寄金の扱い(緊急・重要)

ネパール政府は地震関連の物資、金銭の寄付について国会からの指示を受け、以下のように関係先に指示した。

(1) 金銭の寄付(送金について)

*地震関連の送金について(寄付

など)

送金者(団体)の趣旨が地震関連の場合、送られた寄付金は受け取り銀行の判断で自動的にPMDRFに移送され、受取人(団体)が受け取ることはできない。

*通常の取引

通常の取引の場合、送金者(団体)は送金目的を明らかにし、受取人(団体)はこれを銀行に提出しなければならぬ。送金目的がない場合、銀行は受け取りを拒否する。

*ネパール人は個人で外貨口座は開けない。外貨で受け取れないがネパール金口座は開けるので、ネパール金で受け取れるが、これも前記と同様に送金目的などの証拠が必要となる。したがって、地震



壊滅的な打撃を受けたバクタプール市内の民家

関連とのことであれば自動的にPMDRFに移送される。

(2) 救援物資

救援物資はいままで無税通関であったが、6月11日、ネパール政府は各方面に次のように通達した。

無税通関を希望する救援物資はすべて政府が取り扱い、政府の配布計画によって処理する。また、自分個人(団体)の希望する指定者(団体など)に配布を希望する場合には通常の関税が課せられ、政府は関与しない(通常の関税率は30%以上)。

ネパールはマナー・ロンダリングの中継地として欧米諸国より取り締まりを強化するよう圧力をかけられており、このため地震に関係する援助金(寄付金)の送金も厳重にチェックしている。なお、在外ネパール大使館経由の寄付金は自動的にPMDRFに振り込まれる。

*PMDRF (Prime Minister Disaster Relief Fund 首相府震災救援基金)

Report

国際山岳会議(集会)に参加・発表

公益社団法人 日本山岳協会常務理事 小野寺 斉

去る3月26日(28日)にかけて、スペインのサラゴサにおいて「IMA2015」と題して山岳関連の多くのカテゴリーに対して意見を発表する集まりが催された。会場は200年の歴史を誇るサラゴサ大学である。内容的にはスポーツ・クライミング、アイス・クライミングなどの山岳競技、21世紀の山岳組織、山岳自然保護、山岳気象、登山の安全性、新素材、ハイキング、能動的(冒険的ではなく)な登山活動など多岐にわたるものであり、各々のテーマに対して数人が発表し、それに対して会場からの質問を受け付ける、円卓テールという形式で行なわれた。

各分野においては、例えば国際スポーツ・クライミング連盟(IFSSC)のマルコ・スコラリス会長、国際山岳連盟(UIAA)のフリッツ・フレイラント会長、そして日山協(JMA)50年のときに日本で講演したアンネ・アランは「21世紀のクライミング」という題で発表していたが、このように発表者は日本にも関係のある、錚々たる顔ぶれであった。アジア山岳連盟(UAAA)事務局長のクリスティヌ・ペ女史はフリッツと同様に「21世紀の山岳組織」について講演した。筆者らに与えられたテーマは「その国におけるかけがえのない山とその管理運営上の問題点」というものであった。この分野においては、4人が指名されていた。後の3人はネパール山岳協会会長のアン・ツェリン氏がエベレストについて、フランス山岳協会会長であるジョージ・エルジェル氏がモン・ブランについて、そしてスペインのシエラネバダ国立公園理事長のフランシス・サンチェス氏が、その管理する国立公園についてそれぞれ発表を行なった。テーマからいって私は「日本人の心の象徴としての富士山、その将来における保全管理上の問題点」と題して発表した。与えられた時間は15分。プログラム上では、この集会の最後の時間に割り当てられていた。

話は遡るが、昨年10月にアメリカ

カのフラグスタッフにおいてUIAA総会が開催され、翌3月の理事会はこの国際山岳会議に合わせ開催するということが決定された。そのときにUIAAのアクセス委員会の委員長であるジュアン・マーチン(スペイン山岳会)から富士山の紹介について打診されていた。理事会開催通知と併行して正式に依頼があったときは一時躊躇したが、最終的にOKの返事を出した。その後、パワーポイントで作成し、事前に発表データをジュアンに送った。彼は運営担当者にそれを見せたようで、いわゆる極東の国の発表を珍しいと思ったのか、元々のプログラムに追加して初めの方に30分で発表してほしいとの依頼が来た。了承したが、出発前日であったため同様のデータで発表することにした。アン・ツェリン氏と2人での発表であった。つまり2度発表の機会を得た。

発表した内容は以下のとおりである。前述のようにパワーポイントを用い、絵(写真)を中心に話を進めた。大筋として古代から中世、江戸時代を通しての山岳信仰、浮世絵、国民生活に密着した山、頂上の有効利用、近年のオー



国際山岳会議の会場となった、歴史あるサラゴサ大学

バーユース、世界文化遺産への登録、今後の管理運営といった点が中心である。付記として、訓練の場としての冬富士の様子、最近の事故状況分析も紹介した。

日本は島国である。同時に国土の約70%以上が山と森で占められており、台地を除いて平野部は15%しかない。そして、多くの水を必要とする農耕民族である。日本海からの大量の水蒸気を含んだ風が山にぶつかり、雨を降らせる。その雨が山から森、平野と流れ、農作業に必要な水を運んでくれる。

我々の先祖は山を崇め、そして感謝する。このようにして徐々に山は信仰の対象に変化していった。農作業する人を基に、ほかの民



円卓テーブル形式で行なわれた会議の様子

族文化と相まって独特の山岳信仰を育んできた。日本各地には、多くの信仰対象の山々がある。これらの信仰心はいまでも物質文明との間の調和を保ち続けている。富士山だけが日本における信仰の対象ではないことはもちろんであるが、以下に述べる理由により、日本人の心の象徴になっていったことを紹介した。

富士山は7～8世紀の奈良時代において、すでに日本最古の歌集である『万葉集』にも歌われていた。現在残っている江戸時代の浮世絵にも数多く描かれている。いまはほとんど見られないが、銭湯などにも富士山の絵が描かれている。江戸時代において「富士講」と呼ば

れる特別な信仰登山が広がった。元々のきっかけを作ったのは長谷川角行がわくぎょうという修験者であるが、江戸享保年間に出現した、ある修験者の登場により急激に広まった。享保年間というのは徳川吉宗の「享保の改革」として有名である。この修験者は食行身禄じきぎんみろくという人であった。彼の死後に生まれたのが「富士講」である。

「講」とは同一の信仰を持つ人々の集まりで、相互扶助の一面を持った団体である。この「富士講」はたちまち江戸庶民の間に広まっていった。実際に富士山に行けない人は、「富士塚」を作ってお参りした。富士山を背景にした巡礼者や「富士塚」をお参りする女性の姿も絵として残っている。「富士塚」は現存している。

さて、浮世絵については、江戸末期、19世紀の葛飾北斎の富嶽三十六景として「神奈川沖浪裏」や「赤富士」といわれる「凱風快晴」、そして、歌川広重の絵画などを紹介した。

次に生活に密着した富士山として、麓はもちろんのこと都市部や山間部、そして高速道路などから天気の良い日は遠望できるという

こと、「富士見町」という地名がある。ここにあって、富士山に懸かる笠雲は悪天の兆しであること、日本で発行されている切手に数多く描かれている（おおよそ60種類以上）ということ、あるいは忍野富士、ダイヤモンド富士、御坂峠からの富士など、見る場所によりそれぞれ趣があることなどを紹介した。

頂上は、かつて富士山リーダーにより多くの気象災害を未然に防いだこと、最近では高所登山研究や大気汚染研究、宇宙分野などの先端研究の拠点であること、なども紹介した。

さて、気になる昨今の情勢である。一昨年はひと夏、つまり7月の山開きから9月末までの間で、8合目以上に約30万人の訪問があったこと、昨年はそれよりは減少したことを伝えた。会場からは「そんなに多いなら、法律を作って規制すればよいではないか」という質問が出た。「確かに法律はないが、保全協力金ということと10000円の入山料を徴収することにしたら、前年に比較して入山者は減少した。このことが原因で減少したかどうかは今後の判断になる」と返答しておいた。

特に絵で多くの状況を紹介した。昼夜の夏の登山者の大行列の様子、ご来光で万歳する様子、一時期の富士山の状況、例えば夏でも白かった富士山、最近ではトイレの設置により大分改善されてきたこと、麓においては不法投棄、それもポランテアの手によってきれいになってきたこと、生態系を破壊しないように乗り物規制をしていること、などなど。富士山を保有している自治体を中心に、学識経験者を含めて今後の保全のあり方について検討していることや、「富士山憲章」についても丁寧に紹介した。「世界文化遺産」に登録されたこと、なぜ自然遺産でなく文化遺産であったかということ、しかし、文化遺産として多くの価値ある建物などが存在していることなどについて、写真を交えながら紹介した。

さらに2016年から始まる、国民の祝日としての「山の日」制定、エベレストと姉妹ピークであること、冬富士の様子を写真で示し、事故状況・傾向についてグラフで説明した。

JAPANESE ALPINE NEWS -Vol.16 2015

The Japanese Alpine Club 110th Anniversary 日本山岳会創立 110 周年記念号

PART I 第 I 部

Fukada Kyuya 100 Mountains of Japan (Martin Hood) Christian Frey
 深田久弥の「日本百名山」(マーチン・フード) クリスチャン・フレイ

Feature Articles-South & North 特集-南と北

Volcan Aguilera 1st ascent & 4 other summits on South Patagonian Icefield Camilo Rada
 南チバゴニア氷原、ボルカン・アギレラ初登頂と四つの未踏峰 カミロ・ラダ
 The Chinese Climbing Expedition to Antarctic Liu yong
 中国隊の南極クライミング・エクスペディション リュウ・ヨン
 Four New Routes in Northern Part of Ruth Glacier, Alaska Kei Taniguchi
 4つの新ルート開拓: アラスカ・ルース氷河北部の登攀 谷口 けい

Journeys 紀行

South Tibet —Blue Sky Expedition 4500m Tamotsu Nakamura
 南チベット: ブルースカイ・エクスペディション 4500km 中村 保
 Exploration in Kinner and Spiti of Indian Himalaya Kimikazu Sakamoto
 インド・ヒマラヤ: キナーとスピティの探査 阪本 公一

High Asia アジアの高地

Veiled Mountains in North Myanmar Tamotsu Nakamura
 ミャンマー北部の知られざる山 中村 保
 First Ascent of Unnamed Peak P6070 (L15) in Zaskar Shuhei Yoshida
 ザンスカール: 無名峰 P6070 (L15) 初登頂 (学習院大学山岳部) 吉田 周平
 JAC girls students Mustang Expedition Kei Taniguchi
 JAC 女子学生隊ムスタン遠征 谷口 けい
 The Third Challenge to Karcha Nala Kazuo Hoshi
 カルチャ・ナラ、3度目の挑戦 (インド・ヒマラヤ) 星 一男

PA RT II 第 II 部

Best Ten Selections ベストテン・セレクション (日本語概説付)

—Japanese Alpine News from Vol. 1 2001 to Vol. 12 2011—

1. Vol. 1 October 2001: チョン・ムスターグ西崑崙—偵察と初登頂 児玉 茂
 Qong Muztag – Reconnaissance & First Ascent, West Kunlun Shigeru Kodama
2. Vol. 2 April 2002: アフガンパミール紀行—禁断のワハン回廊 平位 剛
 A Journey to Afghan Pamir – The Forbidden Corridor Wakhan Go Hirai
3. Vol. 3 May 2003:
 インド・日本東カラコラム 2002 パドマナム 7,030 m 初登頂 H・カパディア 坂井 広志
 Indian-Japanese Eastern Karakoram Expedition 2002 – First Ascent of Padmanabh 7,030m and Quest of Teram Shehr Ice Plateau Harish Kapadia and Hiroshi Sakai
4. Vol. 3 May 2003: ヤルンツァンポー源流カチュール・カンリ初登頂 和田 豊司
 Triumph of Kaqur-Kangri in the source of Yalung Tsangpo
 同志社大 Doshisha University Expedition to Ronglai Kangri Range Toyoji Wada
5. Vol. 5 May 2004: ネパール・ヒマラヤ フンチ 7036m 初登頂 大阪鋭峰山岳会
 First Ascent of Hungchi 7036m Osaka Eiho Alpine Club
6. Vol. 7 2006: 日本の登山信仰—日本山岳会創立までの日本の登山 江本 嘉伸
 Mountain Worship in Japan – The History of Japanese Mountaineering until the Founding of the Japanese Alpine Club Yoshinobu Emoto
7. Vol. 8 2007: ローツェ南壁冬季登攀、JAC 東海支部、夢叶う 田辺 治
 Lhotse South Face Winter Ascent JAC Tokai-Dream has come true Osamu Tanabe
8. Vol. 10 June 2009 (2009 17th Piolets d'Or): (2009 第 17 回 黄金のピッケル賞受賞)
 カメット東南壁初登攀 (インド・ヒマラヤ) 平出 和也 & 谷口 けい
 The First Ascent of Southeast Face of Kamet K. Hiraide & K. Taniguchi
9. Vol. 11 2010: ロブチン峰 6805 m 初登頂、2009 カンリガルボ遠征 井上 達男
 The First Ascent of Lopchin Feng (KG-2) 6,805m – Autumn 2009 Expedition to the Kangri Garpo East Mountains, Tibet Tatsuo Inoue
10. Vol. 12 2011 (2011 19th Piolets d'Or): (2011 第 19 回 黄金のピッケル賞受賞)
 ユーコン、マウント・ローガン東南壁登攀 岡田 康
 The Southeast Face of Mount Logan, Yukon Yasushi Okada

Look back

回想——ジャパニーズ・アルパイン・ニユース

中村 保

創立110周年記念号を最初に手に取ってもらいたかったのは、恩人の故ビル・パトナムさん（元アメリカ山岳会名誉会長）です（「山」2014年2月号参照）。『JAN』（Japanese Alpine News）を評価し、アメリカ山岳会（2007年）と国際山岳連盟（UIAA、2014年）の名誉会員に推挙してもらいました。『JAN』を通じて、世界の登山界の人脈が広がることを実感しました。クリス・ボニントンさん、ミック・ファウラーさん、伝説のクライマー、ジョー・ブラウンさん、ジェルツイ・ワラさん、ハリツシュ・カパディアさん、アン・ツェリン・シエルパさんなど、多くの登山家の知己を得ることができました。交友関係は財産です。

冒頭の深田久弥『日本百名山』の英訳者（チュリヒ在住）は、私の親しいスイス人登山家の友人で、彼の薦めで紹介し、書評を書いてもらいました。人の繋がりは大事です。振り返ると、故・吉沢一郎先輩と共通の友人で、米国登山界の重

鎮ニコラス・クリンチさんが『JAN』発行の引き金になりました。クリンチさんのアドバイスで2000年に、当時の『アメリカン・アルパイン・ジャーナル』編集長クリスチャン・ベックウィズさんが来日しました（JACと日山協で講演）。

彼が「山と溪谷社の『岩と雪』の廃刊（1994年）以後、海外との情報の交流が途絶え、日本は世界の登山界から孤立している」と忠告してくれたことが、長く登山界から遠ざかっていた、自称「キセル登山家」には衝撃的でした。そう言われてみると、日本発の登山関係の英文誌はありませんでした。ヒマラヤ黄金時代の輝かしい日本隊の記録は、JAC『山岳』に貧弱な英文サマリーが付け足しのように載せられていただけで、しかも、わずか30ほどの海外の山岳会に送られていただけでした。

ベックウィズさんの言葉に触発され、英文誌の発行をJACに諮ったところ、当時の常務理事・村井龍一さんの積極的なサポートと

大塚博美会長の前向きなご理解を得て、第1号を2001年10月に発行し、日本発の発信を立ち上げることができました。以来、徐々に巡航軌道に乗り、世界で認知され今日に至っています。発行の構想はJACに留まらず、オールジヤパン、さらには海外も視野に入れ、掲載の対象としては①パイオニア的登山・踏査・探検、②価値ある登攀記録、③科学的なフィールド調査を三本柱に据えました。編集は効率とスピードを旨とし、15年間、シングルハンドで取り組んできました。

欧米の山岳誌は総じて写真と地図が少ないことに着目し、『JAN』は写真と地図をふんだんに載せ、差別化を図ってきました。そのお陰で、2007年の国際山岳連盟UIAA松本総会では、『JAN』発行と地図作成を通じて世界の山岳界に貢献した、として表彰されました。

とりわけ、『JAN』と車の両輪の一つである「ヒマラヤの東」踏査と地図が称賛されてきました。

知られざる最大の苦労は、誰に發送するかということでした。団体はUIAA所属の山岳会、協会

が主ですが、個人については大変でした。米国はベックウィズさんに、欧州はバルセロナ近郊のスペイン山岳図書館（欧州登山界に精通）に、インドはヒマヤン・クラブに、ニュージーランドは山岳会会長にお願いして情報を集め、メーリング・リストを作り、毎年、注意深く更新しています。110周年記念号の海外への送付は、団体は図書館も含め130、個人550人で、世界の著名な登山家、探検家をほぼ網羅しています。

100周年記念の2006年号でも日本の登山史を取り上げましたが、110周年号では、15年間の記録されるべきハイライトのベスト・テンを独断と偏見で選んで再録、日本の登山の流れを俯瞰しようと試みました。ベスト・テンには日本語の概説を付けました。發送して間もないので、この原稿を書いている時点では海外からの反響はまだありませんが、通例では励みになるメール、傾聴すべきアドバイスが届きます。孤独な挑戦が報われます。感謝の気持を込めて返事を書くのも楽しみの一つです。立ち上げてから15年、感慨深いです。一つの区切りがきました。

「山の日に向けて」山を考える②

日本の山の野生動物

安間繁樹

日本の代表的な野生動物はなんでしょう。サル、ウサギ、タヌキ、キツネ、クマ。昔話によく出てくる動物は、昔から身近な野山にいた動物たちです。そして、この動物たちこそが日本を代表する野生哺乳動物です。

日本には帰化種を除き、112種の野生動物が分布します。一番多いのがコウモリで33種。次がネズミの仲間で27種。硬いクルミやドングリをかじって食べるリスやムササビも同じ仲間です。モグラの仲間は19種。ほかはサルやシカなど中形から大形の動物です。

日本は、野生動物の種類がとりわけ豊かな国です。イギリスは日本と同様に昔は大陸とつながっていた島です。面積は日本の3分の2でやや小さいものの、在来動物は40種類に過ぎません。

現在の動物の分布を決めたのは、最後の氷河時代に繰り返された気候の変化です。氷期には、北極や北の地方では食べ物がなくなり、動物たちは比較的寒さが穏やかな

南へ移ってきました。反対に間氷期には、赤道に近い南の地域に住んでいた動物たちも、生活の場を北の方に広げていきました。

氷期と間氷期が繰り返しやってきたために、北の動物たちが生きる場所を広げ、南の動物たちを追いやった時期と、その逆の時期とが交互にあつたわけです。その北と南の「押しくらまんじゅう」がちょうど日本辺りの緯度で繰り返されました。しかも、気候の変化によつて、すべての動物が入れ替わったわけではなく、動物の中には、新しい気候に耐え抜き、そのまま日本で生き続ける動物もいました。



ニホンカモシカ(ハケ岳にて)

日本にたくさんの種類が分布する理由は、北南両方の要素が含まれているからなのです。

日本の動物のうち、3分の2が北方起源、残りの3分の1が南方起源です。ヒゲマ、オコジョ、ノウサギ、リス、キツネ、タヌキなどの祖先はヨーロッパやアジア大陸の北の地域で生まれました。ニホンザル、モグラ、ムササビ、イノシシなどはアジアの赤道近くやアジア大陸の南の地域で生まれた動物の子孫です。

日本固有種とは、ニホンザル、ヤマネ、アカネズミ、6種のモグラを含めた約30種類で、世界中で日本の一部でしか見られない動物です。祖先は北から、南からやつて来た動物ですが、長い年月の間に別種の段階にまで分化しました。そして、日本が大陸と切り離されたことで、日本と大陸の間を自由に行き来することもなくなり、日本の中で生き続けているのです。

日本は山地が多く、森林に覆われた国です。とりわけ豊かな日本の動物たちは、この、里山から深山につながる広大な森林に支えられて生きているのです。

「山の日」メモ

作曲家で当会会員の船村徹さんが祝日「山の日」の制定を記念してみんなに親しまれる歌を作ろうと提案した。ついでに歌詞を一般から募集したらどうかということから全国「山の日」協議会で公募の準備を進めている。歌といつてもこどもの歌、若者の歌、演歌調といろいろある。募集要項を近く発表の予定▼同協議会は随時運営委員会を開いて「山の日」周知の妙案? を考えている。5月の会議では歌詞募集のほかに記念切手発行を働きかけたというアイデアが出された。切手では最近の山岳シリーズをご存じの方が多いと思うが、昨年スタートした「信州山の日」でも、数は少ないが記念切手が発行されている▼次は缶バッジのPR。先の全国「山の日」フォーラムで作ったヤマネの缶バッジがかわいいと好評。全支部にサンプルをお届けしたら、3支部からまとめた注文が来た。実費でお分けする。



創立110周年記念事業

日本三百名山登頂シリーズ①報告

日光・太郎山と
足尾・袈裟丸山

竹中芳江

5月23・24の土・日に、この2山に総勢12名で登ってきました。今回の企画は、日本山岳会110周年を記念し、日本三百名山登頂シリーズの第1弾として太郎山と袈裟丸山が選ばれたようです。私はアルパインツアーからの参加でした。両日とも天候に恵まれ、カラマツの新緑の美しさ、ヤマツツジ、トウゴクミツバツツジ、シロ



初日は太郎山へ

ヤシオ、アズマシヤクナゲなど、たくさんのお花たちに迎えられ、元気をもらい癒されました。

太郎山は「日光三陰」のひとつと聞いていたので緊張しましたが、急登やガレ場も難なく通過することができました。当初の予定では、光徳牧場から山王帽子山→太郎山→裏男体林道という行程でしたが、時間の都合で太郎山の往復に変更。それでも宿に着いたのが午後7時を過ぎていました。宿は足尾銀山平の国民宿舎「かじか荘」です。太郎山に登り一番感動したのは、我家から1年にほんの数回、空気の澄んだ冬の寒い日に見ることのできる「男体山」が、目の前に凛々しい山容を見せてくれたこと。懐かしい人に出会えたような、なんともうれしい気持ちになりました。

の辺りの縦走も面白そう、と盛り上がりつつありました、少数で(笑)。袈裟丸山という名前のピークがないこと、ヤシオツツジが栃木県の県花だということを初めて知りました。

袈裟丸山(前袈裟丸山)は本当にツツジの多い山です。そして、山頂北側の斜面にはアズマシヤクナゲがたくさん咲き、登山者を迎えてくれていました。袈裟という名前もそうですが、賽の河原も数ヶ所あったり、弘法大師伝説、寝釈迦像、相輪塔もあるとのこと。昔は宗教的な役割を担っていた山なのででしょうか。塔ノ沢コースもぜひ歩いてみたいと思いました。今回現地ガイドとして参加していた小島さん、大変お世話になりました！2日間とも私の前を歩かれましたので、色々教えていただき、贅沢な山旅でした。

(会員外参加者)



寄付金および助成金などの受入報告

平成27年5月まで

寄付者など	金額	寄付の目的、その他
松野賢珠 会員	2万円	永年会員からの会費相当額の寄付
落合正治 理事	10万円	法人運営費用として
山田和人 理事	10万円	法人運営費用として
三井住友信託銀行	50万円	高尾の森づくりの会へ寄付
オーエムシー株式会社	100万円	学生部海外登山隊へ寄付

ネパール大地震救援募金は、別途集計中です。

INFORMATION

創立百十周年記念事業 日本三百名山登頂シリーズ③

南アルプス白峰南嶺・笹ヶ岳と山伏2泊3日 参加者募集!

「日本三百名山登頂シリーズ」という山行企画第3回のご案内です。今回は南アルプス・白峰南嶺の日本三百名山、笹ヶ岳(2629m)と山伏(2014m)に登ります。JAC会員以外の方も参加できますので、山仲間やご家族などお誘い合わせの上、奮ってご参加ください。本企画の特徴は、

*日本山岳ガイド協会のガイド資格を有するツアーリーダーが1名(最少催行人数7名の場合)同行します。

*インタープリター(解説員)として当該山域に精通しているJAC支部会員(第3回の場合は静岡支部)が、また、サポーターとして本部集委員会スタッフがそれぞれ1名同行します。

【第3回目・行程など】

期間 8月7日(金)～9日(日)集合開散 JR静岡駅前10時集合、16時ごろ解散予定

行程 1日目/静岡駅(送迎車)

畑薙ダム(送迎車) 榎島。夕刻、足慣らしの散策(1時間) 2日目

／榎島往復10時間) 笹ヶ岳3日目／榎島(送迎車) 畑薙ダム(送迎車) 百畳峠(往復2時間) 山伏。百畳峠(送迎車) 静岡駅解散 食事 朝2回、夕2回(昼食は各自、行動食をご持参下さい)

宿泊 2泊とも榎島ロッジ

参加費 会員／6万1000円

会員外／6万3000円

定員 17名(最少催行人数7名)

申込み・問合せ 〒160-0000

08 東京都新宿区三栄町25番地 三栄ハウス202 (株)アトラス

トレック

TEL 03-3334-10030

FAX 03-3334-19200

日本三百名山登頂シリーズ係まで。担当 今村

✉ info@atastrek.co.jp

*お申込みの方に詳細な案内をお送りします。

(創立百十周年記念事業実行委員会／集委員会)

支部

だより

越後支部

第5回中部ブロック(4+1)

支部交流会の報告

4月5・6日に第5回中部ブロック(4+1)支部交流会が、越後支部主催により新潟市の奥座敷といわれる岩室温泉「ホテル大橋」と角田山(482m)で開催された。地元越後支部44名、信濃支部10名、山梨支部9名、静岡支部11名、東京多摩支部7名の合計81名の参加者が集い、大変な盛会であった。

越後、信濃、山梨、静岡の支部が中部ブロックとされたのは、いまから三十数年前の昭和57年のことらしい。この年に最初の支部懇談会が信濃支部担当で開催され、翌年静岡支部が担当したらしいが、3年目から中断された。そして平成7年に、中部ブロックで創立90周年記念の登山が山梨支部担当で開催され、さらに平成17年の10

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

0周年記念として、越後支部担当で4支部の交流が図られてきたのがこれまでの経緯である。

「中部ブロック交流会を復活しよう。」という四支部間の意見交換がなされ、平成23年に越後支部主催で津南小松原湿原、平成24年は信濃支部主催で上高地焼岳、平成25年は山梨支部主催で富士山北麓、平成26年は静岡支部主催で伊豆天城山ということで継続開催されてきた。平成27年は一巡して越後支部主催となったが、東京多摩支部も参加して(4+1)支部交流会として行なった。東京多摩支部は、昨年7月25日の第57回高頭祭に二十数名参加していただき、翌26日に角田山山行を計画されていた。折しも梅雨明けのフェーン現象で新潟地方が37～38℃とあまりにも暑く登山を中止されたため、4月初旬の花のきれいな時期に再度、角田山へということで声掛けをさせ



岩室温泉で開催された中部ブロック支部交流会

ていただいた。

5日13:00ごろから各支部の参加者が続々と集合し始め、受付後部屋割りなどを確認していただき、いったん長旅の疲れを癒していた。支部合同会議場所前の廊下にて越後支部フォト・スケッチ同好会(本間一人代表)が「越後の山々」写真展を開催し、多くの方々に鑑賞していただいた。

14時30分より支部合同会議が始まり、橋本正巳越後支部長から「ようこそ越後の山へお越しいただきました。」と歓迎の開会挨拶。さらに東京多摩支部の一員として参加された森武昭会長から、「支部交流をどんどん活発にして行くこと

が、日本山岳会の活性化につながる」とのご挨拶をいただいた。

14時40分から講演会となり、最初に越後支部・山崎幸和顧問(前支部長)から「西蒲三山の歴史と民俗」と題しお話ししていただいた。山崎さんは、「西蒲三山」とは越後の西蒲原地方の山で弥彦山(634m)を盟主とした角田山と国上山(313m)の総称であると説明。さらに日本海からそり立ち展望が良く、「佐渡・弥彦・米山国定公園」として昭和25年に国定公園第1号として制定された。審議に当たっては、日本山岳会の重鎮であった田部重治氏と村井米子氏が厚生省の役人と来県され、弥彦山頂から越後平野を眺め、国定公園として問題なしとお墨付きをいただいたことなどを話された。山崎さんの講演は、予定の1時間を10分も超過する熱演に皆さん興味深く聞き入っていた。

次に越後支部女性支部会員のリーダー的存在である山田智子さんから、「西蒲三山の植生と春の花」と題し講演していただいた。角田山は「新・花の百名山(田中澄江)」に選定されており、3月中旬から4月にかけてもっとも見頃の季節

であり、特に雪割草やカタクリの群生が見事であることを紹介された。明日の山行までに天候が回復し雨が降らないように、今夜の懇親会でお酒をたくさん飲んでお祈りしましょうと締めくくっていただいた。

17時〜18時30分までは入浴や休憩時間としてくつろいでいただき、18時30分より懇親会を開始した。越後支部名誉会員の土田幸雄氏より乾杯の音頭を取っていただき祝宴となったが、早々席を立つての懇親が始まり、1年ぶりの支部交流に話が弾んでいった。各テーブルに越後支部の「越乃寒梅」と「雪中梅」が配置され、信濃支部の「大雪溪」、山梨支部の「甲州ワイン」、静岡支部の「高砂」、東京多摩支部「多摩自慢」が寄贈された。さらに、

森会長、東京多摩支部川口さん、越後支部の蘆本さん、菊入さん、加藤さん、小山さんと続々とお酒の差し入れがあり、お礼を申し上げたい。

20時30分に来年開催担当の信濃支部塚原支部長から、中締めを音頭をとっていただきお開きとなった。

翌6日は、昨夜のお神酒が効い

たせいか、雨は止んで薄曇りの天気となった。越後支部の小山事業委員長からコースコンディションと天候を考慮して、全員が浦浜コースから角田山を目指すことに変更すると発表があり、8時にマイクロバス2台で宿舎を出発した。登山口で準備運動を行ない登山開始、最初15分くらいの急登を終え、となだらかな稜線となり、カタクリの群生が始まった。

いろいろな山野草を眺めながら写真を撮ったりして、遅々として進まないが雨の心配もなさそうである。のんびりと2〜3時間程度の軽汗をかきながらの楽しい登山であり、とくに落伍者もなく全員が角田山頂上に到着、下山は桜尾根コースを通り、日本海の角田浜に降りた。マイクロバスが迎えに来てくれて13時30分宿舎に到着し、来年の再会を約束して解散式を行った。

(桐生恒治)





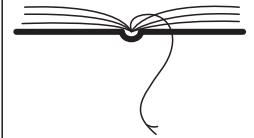
四国沢紀行

日本山岳会四国支部編著



2015年4月
日本山岳会
四国支部
B5判 92頁

図書紹介



本書は、四国支部の若手会員が中核となつて作成した、四国の沢を多くのカラー写真付きで紹介する書籍である。

沢1本あたり1〜2ページで43本の沢が紹介され、うち28本の沢には3分の1ページの遡行記録（無味乾燥なものではなく、遡行時の感想に基づくものだと思う。沢愛好家が記録を読めば、情景を想像でき遡行意欲がかき立てられるだろう。少なくとも評者はそうである。）が載り、14本の沢の遡行図が付されている。また、資料（四国で遡行対象となる141本の沢の一覧）も収録されている。

沢の位置を明示する地図は付されていないので、地形図と首つ引きで場所を探す必要がある。また、ガイドブックのように遡行のポイントを詳解するものではない。そのため、万人にとって使い勝手が良いとは必ずしもいえない。しかし、インターネット上には多くの情報があり、問題の多くは解決できる。のみならず、それらの点を一蹴してなお余りある特徴が2点ある。

一つは、四国の沢に関する書籍という点である。評者はこれまでに四国に特化した沢の書籍に接したことはない。一度に多くの四国の沢を紹介する本書の発行は、巻頭で茂木会員も指摘されているとおりすばらしいことであり、全国の沢愛好家にとって革命的な出来事といえよう。また、多数のカラー写真を用いて作成されているので、沢登りをやらない登山者や四

国に縁のない登山者も、眺めるだけでも十分楽しめる。

もう一つは、四国支部の若手会員が中核となつて作成した点である。百戦錬磨の会員からすると内容的に物足りないかもしれない。しかし、尾野四国支部長の全面的なバックアップがあったとはいえ、作成メンバーは山を始めて数年の会員が中心であり、出来として十分ではなからうか。

なにより、若手会員の獲得および育成の方針が結実しつつあることとの好例であり、100年を超える日本山岳会の歴史における一つのマイルストーンたるべき書籍であることは間違いがなく、その点でも価値が高い。

若干の難癖を付けてみたが、それを一蹴する特徴や情景を容易に想起させる多くの写真と遡行記録を登載する本書は、値段以上の価値を有し、購入を後悔することはない。評者はそう確信している。

（直江俊武）

斎藤一男著

山 その日の人 上・下



2015年1月
論創社
四六判
上)419頁、下)336頁
定価 各2800円＋税

「登山とは文化的行為である。」と喝破したのは桑原武夫である。

私もずっとそう思ってた山を登ってきた。ただ先日、ある日本百名山遍路と出会ってから自信がなくなっている。「あなたはいくつ百名山を登った？」と尋ねられたので「50くらいでしょうか」と答えると、急に上から目線になって「僕はあと5山で100名山だよ」とのたまう。少しカチンときたので『日本百名山』について尋ねると、深田久弥の名前はるか、そういった本があることさえ知らない。

この例は極端かもしれないが、最近山を登っている人と話をしているにも登山史、山の文化などに話が及ぶことがめつくり少なくなくなっているような気がする。

本書は日本の登山史を文化的側面に重点を置いて解説した大著である。登山史書というと登山にまつわる出来事を時系列で解説したものが多い中で、文化・社会に関する記述が多く、類書とは違った

新鮮な内容にあふれている。

著者の斎藤一男氏は日本山岳文化学会を創設し、初代会長を務めた登山家である。それ以前は山学同志会を主宰し、日本山岳協会会長の務めていたこともある。日本の山岳界を牽引してきた人物といっても過言ではないだろう。

著者には危惧していることがある。それは本書の端々に溜息となつて吐露されている。

「山はかつてあったような信仰や尊敬、冒険の対象ではなく、都会人がストレスを発散するためのアスレチックフィールドに成り下がってしまったのである。」

ただそれだからこそ著者は力強く読者に語りかけてくるのだ。

「……親切な案内書を頼りにして一山、また一山、百名山、二百名山を志し、としないほしい。山に謙虚な気持ちで接し、山の文化を学び、心の浄化道場として励まされることを期待してやまない。そして美しい山の自然を、私たちの祖国日本へ愛する子孫に残してもらいたい。」それが本書を世に送る本来の目的だと著者はいう。

登山が文化的行為だった時代が誰も振り向かない過去になってし

まいつつある昨今、ぜひ多くの登山者に本書を繙いてもらいたい。登山は遍路ではないし、単なるスポーツでもレジャーでもない。本書を読んでいくばくかでもそれを感じ取ってくれる人が増えることを願ってやまない。(近藤雅幸)

平位 剛著

ワハーン回廊 ―自然と棲む人たち―



2015年2月
霞が関出版
A4判 153頁
定価 4500円＋税

金子民雄氏が序で述べているように、「ワハーン回廊」といつても、我々にとって一体なにかのかすぐに分かる人はそう多くないであろう。中央アジアやパミールに親しんだ人でさえ、とっさに思い浮かばないこともあるかと思う。」パミールとヒンドウ・クシユ山脈の間のアフガニスタンの北東端の高所渓谷地帯である。イシュカシムから東西300km、南北15く

65kmで、北はタジキスタン、南はパキスタン、東は中国に囲まれている。

1800年代、露英の国境問題が起き、ワハーンはその緩衝地帯となり、1960年、ソ連軍のアフガニスタン侵攻と、その後タリバンによるテロが続きますます入域が困難となった。著者は1969・71年2度の登山、その後1998年から3夏の記録を、『禁断のアフガニスタン・パミール紀行』で2003年に出版している。

この度の『ワハーン回廊』は、2度の登山と2011年まで計8回のワハーンほぼ全域を踏査した記録写真集である。アフガニスタンの首都カーブルからサーラング峠を超え、ワハーンの西玄関口イシユカシムを経由し、オクサス河合流点まではトラックで入る。

1969年登頂した東部ヒンドウ・クシユ山脈のシェール・コー(6392m)、そしてパミール河を遡る。1971年登頂のワハーン山脈のコーイ・ハーン(6020m)、高仙芝の連雲堡趾を踏む。さらに東にワフジールと小パミールでのキルギス人の放牧地、そこ



2014年12月
成山堂書店刊
A5判 275頁
定価 2500円＋税

南極観測船「宗谷」航海記 —航海・機関・輸送の実録—

南極O.B.会編集委員会編

から中国国境を展望している。ワ
ハーン山脈の峠を越え大パミール
ではビクトリア湖の全貌を踏破し
て、玄奘とマルコポーロの足取り
を検証している。また、東部ヒン
ドゥ・クシュ山脈の7峠、大、小
パミールを結ぶワハーン山脈越え
の5峠、中国へ向かう2峠を踏ん
でいる。その間、キルギス人の男
性と女性の服装、衣服、靴、乗り
物、家畜、機織り、フェルト作り、
ユルトの内部、チーズ作り、など
住民との信頼交流がなければ撮れ
ない写真がふんだんに載っている。
本書に挿入された写真はどれも

敗戦、占領の時代から独立して
間もないころのわが国が、国際社
会に入り、南極観測に加わろうと
する夢のような快挙に日本中が湧
き上がったことを、当時、高校生
だった私も思い出す。

海上保安庁の灯台修理船を改造
した初代南極観測船「宗谷」は、1
956年11月に晴海埠頭からの初
航海に出港して以降、第6次まで、
観測隊員と資材の輸送に携わった。
本書は、「宗谷」の乗組員や南極
の空を飛び回ったパイロットたち
の貴重で冒険的なパイオニア・ワ
ークの実録である（「航海記」「航
空オペレーション」）。

「海鷹丸の航海記」では初航海の
「宗谷」に同伴（支援）して、氷海で
の苦闘ぶりが臨場感あふれている
し、「宗谷医務長記」は氷海上での
手術、村山雅美隊長はじめ観測隊
員たちとの心温まる交流をユーモ
アたっぷりの筆致で回想していて、
昔語りのなよき時代の南極航海の
読み物として楽しめる。

従来から、観測隊員の記録や成
果を伝える本は多々刊行されてき
た（例えば、西堀栄三郎『南極越冬
記』は今も読み継がれている）けれ
ど、乗組員や船を動かす機関士、航

Climbing&Medicine・68

山地のブユ対策

秦 和寿

ブユの被害

春から秋にかけ尾根筋などを歩いて
いるとき、頭の周りを黒っぽいコバエ
様の小さな虫が多数飛び回ることがよく
あります。この微小な虫はブユです。
うっとうしいだけでなく、頭髮の中に入
り込んだり、顔などから吸血します。
少し正確にいうと、ブユは口器で皮膚
を噛み、血をなめるのです。都会の人は
ブユに刺された経験が少なく、ひどく
腫れ上がります。ブユの唾液には高分
子化合物があり、アレルギー反応を起
こすからです。幸いなことに海外のブ
ユのように感染症を起こすことはありません。

ブユが飛翔するのは3月から11月ぐ
らいまでで、とくに天候が曇りで湿度
の高いときに多く発生します。ブユは
国内を代表する吸血昆虫で、古来から
その対策に追われてきました。奈良平

安の時代から、昭和30年代まで柚人や農民は、「燻し」とい
うワラを燻してブユを追い払う防虫具を作成してきました。
駆除というより煙で忌避させるのです。

余談ですが、こういったブユをはじめ双翅目（微小なサ
シバエやキバネクロバエ類）の昆虫は、クマなどの哺乳動
物に着いて動き回っています。山中でクマの糞を見つけ、
獣のうなり声が聞こえ、さらに急に微小な昆虫が異常に
多くなったとき、すぐそばにクマなどの獣が藪の中にい
る可能性があります。ブユ類は哺乳動物の接近を知らせ
る指標昆虫でもあるということです。

ブユを防ぐ

山の中で多数のブユに遭遇した場合とても困りますが、
ブユの防ぎ方は次のとおりです。第一に長袖等の着衣
と着帽で皮膚の露出部分を少なくします。ブユが発生す
る山城では長袖シャツと帽子を忘れてはなりません。さ
らに首回りなどは手拭いで覆い、状況によりほっかぶ
りのようなことも効果的です。清潔な手拭いはかさばら
ないし、捻挫などの応急処置もできるので有用です。第二
にディートと呼ばれる虫除け剤の使用です。スプレー式
などが市販されています。汗で成分が流れたり時間が経
つと効果がなくなります。ほかに携帯用の蚊取り線香を
腰にぶら下げ燻すこともブユを忌避します。人によっ
ては薄荷（はっか）入りの飴をなめるなどそれぞれの防虫法
があるようです。ほかに刺されたときのために虫刺され軟
膏もあれば便利です。虫刺され薬は抗ヒスタミンとステ
ロイド剤が主成分で、腫れや痒みを減少させます。

山岳人はブユに限らず山の害虫に対して自分に合う虫
除け方法を持つ必要があると思います。吸血昆虫等に対
する基礎知識と防虫具の携行です。具体的には長袖着衣、
帽子、布（手拭い）、虫除けスプレー、虫刺され軟膏など、防
虫グッズを活用して虫害を防ぎます。

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご利用ください。

日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 <http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html>

海士の仕事や業績が書かれた本の刊行はこれが初めてではないか? 「観測隊員の記録」編も設けられている。初期の観測隊は、当時の日本山岳会会員が重要な任務で活躍した。多くの方々は鬼籍に入られたが、中村純二会員が、食糧計画、観測の成果やタロ、ジロとの再会などを回想している。宮原巍会員は、南極体験が後の人生に大きな影響を与えたと語っている。「資料編」にはユーモアと諧謔に満ちた『ペンギン日記』(朝比奈菊雄著)と『南極新聞(第一次隊)』(これも朝比奈菊雄版元)の抜粋が載っていて、緊張感とほほえましい雰囲気想像できる。

「宗谷」は、1938年の誕生から波乱の経歴(船歴)を経て進水から70年、船の科学館(東京臨海副都心)に永久保存展示されている(南極観測船宗谷物語「村越望」)。

また、巻頭のカラー版口絵は、「宗谷」の改装された過程や、氷上のヘリポート、初期の昭和基地風景、タロとジロや「宗谷」を救出したオビ号(ソ連)などの珍しい写真が載せられていて、資料としても貴重なものだろう。(松澤節夫)

インドネシアの山に登りませんか

日本山岳会創立110周年記念事業実行委員会

日本山岳会110周年記念事業として、インドネシアの山のガイドブックの出版を目的とするプロジェクトが始まりました。赤道直下のインドネシアには富士山を超える山も数多くあります。その調査のためインドネシアの各島に、2年間で3回登山隊を派遣することを計画しています。

本年度は、10月下旬にジャワ島に会員登山隊を派遣する予定です。現地協力者による案内で、技術的には難しくない山に登る計画を立てています。登山隊への参加費用は自己負担になります。

登山説明会を平成27年7月18日(土) 午後日本山岳会本部で行ないますので、興味のある方はご参加ください。お問い合わせは吉川(✉mark_tokyo@nifty.com)または本部にご連絡ください。全体計画は下記のとおりです。

実施予定	作業	作業内容
2015年6月13日から4週間	児玉会員の現地調査と作業準備	児玉会員のジャワ島滞在および現地協力者とのスラウェシ島での登山
2015年7月18日	説明会① 「インドネシアの山登り2015」	JAC本部における、ジャワの山を対象とする派遣登山隊説明会
2015年10月下旬の10日間	登山隊① 派遣(写真・登山道データ更新)	会員募集隊 ジャワ島スメル山(3676m)などに調査登山隊を派遣。
2016年4月初旬	説明会② 「インドネシアの山登り2016」	JAC本部における登山隊説明会 インドネシアの山
2016年7月3週間	現地調査と作業準備 (ガイドブックの準備)	児玉会員および現地協力者によるジャワ島滞在与スマトラ島での調査登山
2016年7月下旬の12日間	登山隊② 派遣(写真・登山道データ取得)	会員募集隊 スマトラ島クリンチ山(3850m)などへの調査登山隊派遣。
2016年10月下旬の14日間	登山隊③ 派遣(写真・登山道データ取得)	会員隊 パプア州ジャヤ峰(4884m)への調査登山隊派遣。
2017年2月下旬の1週間	出版記念現地キャンペーンと登山隊④	児玉会員と現地協力者および会員募集隊、ジャワ島へのツアー登山隊派遣

図書受入報告(2015年5月)

編 著 者	書 名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
一等三角点研究会(編著)	登山案内 一等三角点全国ガイド	260p/21cm	ナカニシヤ出版	2015	編著者寄贈
慶応義塾体育会山岳部(編)	登高行 第20号 : 慶應義塾体育会山岳部 100周年記念号	268p/27cm	慶応義塾体育会山岳部	2015	発行者寄贈
JAC東京多摩支部(編)	東京多摩支部設立5周年記念誌 : 5th Anniversary	167p/21cm	JAC東京多摩支部	2015	発行者寄贈
米倉久邦	日本の森列伝 : 自然と人が織りなす物語(ヤマケイ新書 016)	350p/17cm	山と溪谷社	2015	出版社寄贈
W.デイヴィス(著) 秋元由紀(訳)	沈黙の山嶺 : 第一次世界大戦とマロリーのエヴェレスト (上巻)	392p/20cm	白水社	2015	出版社寄贈
W.デイヴィス(著) 秋元由紀(訳)	沈黙の山嶺 : 第一次世界大戦とマロリーのエヴェレスト (下巻)	410p/20cm	白水社	2015	出版社寄贈

平成27年度第2回(5月度)理事会
議事録

日時 平成27年5月13日(水)19時00分～20時55分

場所 集会室

【出席者】森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、勝山・山田・野口・落合・川瀬・山賀・直江各理事、浜崎監事

【欠席者】大槻理事、吉永監事

【審議事項】

1・平成26年度事業報告・決算(案)について

別添資料により審議し、事業報告(案)の一部を修正した。(賛成14名、反対なしで承認)

2・次期人事(監事)について

次の監事候補者について審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

〔監事候補者〕《新任》重廣恒夫(7931)

3・監事と支部長の兼任について

公益法人運営委員会から示された「支部における業務執行の責任者である支部長が、その業務を監査する監事を兼務することは不可

である。」との見解について、別添資料により審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

4・海外登山基金の取り崩し額の修正について

平成26年度第11回(3月度)理事会で承認済みの平成26年度中に実施した110周年記念事業における海外登山基金からの取り崩し額について、寄付金額が増加したこ

とに伴い、当初予定していた630万円から488万円に減額して取り崩すことについて、別添資料により審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

5・ネパール大地震への対応について

平成27年4月25日に発生したネ

パール大地震の被災者救済のため、日本山岳会を含めた山岳6団体が共同で募金活動を行なうこと、および、「日本山岳会ネパール大地震救援募金」口座を開設することについて審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

6・支部長の交代について

埼玉支部および山形支部から、以下のとおり支部長交代の答申があり審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

埼玉支部・現支部長 大久保春美(7249)↓新支部長 松本敏夫(12047)

山形支部・現支部長 粕谷俊矩(9595)↓新支部長 木村喜代志(7734)

7・人会希望者承認について

27名の入会について、別添資料により審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・八王子市の高尾山口駅周辺施設の運営について(森)

標記の管理を委託された京王電鉄(株)から本会に、運営に関する協力依頼の話がある。今後、その依頼内容を精査し、対応する組織等

について協議した。

【報告事項】

1・平成27年度通常総会の資料、出欠票・委任状・議決権行使書の様式等について別添資料により報告があった。(高原)

2・平成26年度事業報告、決算の監事監査が、本日(5月13日)終了した旨の報告が別添資料によりあった。(浜崎、吉川)

3・故吉田周平氏(前学生部委員長)のご遺族から受けた寄付金について、使途をYOUTH CLUBにおいて検討するとの報告があった。(吉川)

4・4月18日に愛知県瀬戸市で開催された第9回森づくり連絡協議会について、別添資料により報告があった。(吉川)

5・4月12日に開催した平成27年度第1回評議員懇談会について、別添資料により報告があった。(高原)

6・日本山岳会が主催する行事に関わる賠償責任保険に、前年度に引き続き加入するとの報告があった。(佐藤)

7・110周年記念事業委員会から、学生部ネパール東部遠征隊2

015の計画について別添資料により、また、ネパール大地震による海外登山への影響等について報告があった。(古野、黒川)

8・会員増強・財政基盤検討PTから、別添資料により会員制度等の検討状況等について報告があった。(黒川)

9・平成27年度の新永年会員候補者37名について、別添資料により報告があった。(高原)

10・神奈川大学創立100周年事業「タサルツエ遠征隊」については、ネパール大地震の影響により、実施時期を延期するとの報告があった。(落合)

11・本年6月7日に実施する第69回ウェストン祭に、本部から森会長、節田・古野両副会長が出席するとの報告があった。(吉川)

12・夏山登山シーズンを控え、遭難事故防止に関する注意喚起を「山」に掲載するとの報告があった。(黒川)

13・大学山岳・WV部監督(コーチ)会議を開催し、学生への指導のあり方等について意見交換を行なうとの報告があった。(古野)

14・第3回夏山フェスタの開催について東海支部から名義後援の依頼があり、承認したとの報告があった。(高原)

15・海外から着信するメールへの対応方法について、フローチャートの一部を別添のとおり修正するとの報告があった。(川瀬・黒川)

16・会員から提案のあった、森づくりに関するサントリー社とのコラボレーションについては、吉川常務理事が中心となり関係者で検討するとの報告があった。(吉川・森)

17・本年1月、遠見尾根での本会会員の遭難事故に伴う捜索に関して、出身母体の稲門山岳会から状況報告と捜索についての協力依頼があった。(古野)

18・今年度末(平成28年3月31日)時点での会費未納による除籍予定者について報告があった。(高原)

19・「山」5月号の発行について報告があった。(節田)

【連絡事項】

1・第4回梅棹忠夫・山と探検文学賞」授賞式 6月4日(水)於・長野市

2・長野県より中部4県の「山のグレーディング」に関する協力依頼

3・環境省からの吉野熊野国立公園大台ヶ原山に関するポスター等の送付案内

4・(一社)日本オオカミ協会からの「オオカミ復活と保護」の案内

5・田淵行男記念館企画展開催 4月21日～9月27日

【今後の予定】

1・第69回ウェストン祭 6月6日(土)～7日(日)

2・平成27年度通常総会 6月20日(土)

ルーム日誌 5月

7日 常務理事会 バックカント
リークラブ

8日 「家族登山」普及委員会
総務委員会 スキークラブ

11日 YOUTH CLUB
評議員会 山岳研究所運営委員会 二火会 スケッチクラブ

12日 評議員会 山岳研究所運営委員会 二火会 スケッチクラブ

13日 理事会 集会委員会 山想倶楽部

14日 図書委員会 フォトビデオクラブ 緑爽会 山岳地理クラブ

15日 支部事業委員会 山の自然

18日 学研究会 九五会
資料映像委員会 スケッチクラブ

19日 110周年記念事業実行PT 00会 スキークラブ

20日 青年部 三水会 つくも会
科学委員会 みちのり山の会

22日 自然保護委員会 フォトビデオクラブ YOUTH CLUB

25日 YOUTH CLUB ス
ケッチクラブ

26日 デジタルメディア委員会
遭難対策委員会 二火会

27日 自然保護委員会 集会委員会
麗山会

28日 学生会 公益法人運営委員会
山遊会

29日 YOUTH CLUB
5月来室者484名

会員異動(5月分) 物故

池田錦重(6031) 15・5・22
森 武雄(6776) 14・9・29
草場九男(11627) 15・3・17
有吉 毅(11861) 15・2・17
寺田和雄(12343) 15・5・2
木村知博(12663) 15・4・30

藤原優太郎(12881)15・5・8
退会

若林妙子(6728) 富山

阿部勇作(7487) 山形

宇津力雄(8350)

辻田代史雄(8578)

川戸昭三(8673) 関西

小林義廣(9130) 越後

岸 恒方(9933) 北海道

赤羽昭夫(10352)

近藤雅是(10677) 埼玉

藻谷 拓(10880) 東海

杏橋達磨(11068)

加藤求二(11523)

清水 真(12302) 北海道

大浦浜雄(13185)

井上 彪(13259) 福井

田村英二(13319)

市川久夫(13537) 越後

並木真二(13727)

小野寺佐與子(13813) 岩手

大石そなえ(14199) 北九州

熊岡良子(14375)

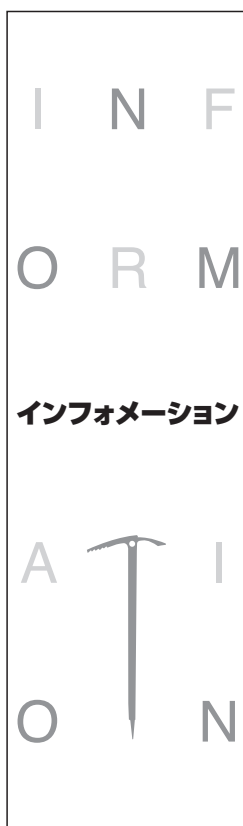
山口富藏(14652) 栃木

石原尚文(14706) 茨城

岡田洋子(15059) 東海

坪山廣子(15321)

佐々木みさと(15355)



インフォメーション

◆第33回図書交換会の出品図書募集

図書委員会

恒例の図書交換会は、本年度も年次晩餐会の会場で開催を予定しています。本棚に眠っている山岳書をお寄せください。会場で希望者に頒布します。

出品図書は8月末日までに、氏名、会員番号を明記して「日本山岳会・図書委員会」宛に。頒布価格は図書委員会に一任させていただきますが、頒布が成立した場合は、価格の8割を出品者にお返しします。なお、原則として出品点数は1人50点までとし、当会の刊行物ならびにガイドブックと雑誌はお断わります。判断が難しい場合は事前にお問い合わせください。ご協力をお願いします。

問合せ 三好まき子

TEL 090-8019-8601

✉ 344mm@mbe.nifty.com

◆図書室よりお知らせ

本年の4月から、樺出版社のご厚意により、月刊誌の『PEAKS』『ランドネ』の2誌が継続的に図書室に寄贈されています。ぜひご活用ください。

お詫びと訂正

「山」5月号(840)号17頁、「新入会員」欄の表中、「会員番号15728 田中哲也」は田中聰恵さんの誤り、「会員番号15734 井上保」は井上優美さんの誤りでした。ご本人および関係者の方々に多大なるご迷惑をおかけしたことを謹んでお詫びし、訂正させていただきます。

(編集部)

◆編集後記◆

●今号は編集長の柏さんが海外取材で不在なため、担当理事である私がピンチ・ヒッターを引き受けました。ところが、ちょうど『改訂新日本山岳誌』の重版と『山岳』の編集作業と重なり、まさに三重苦のような状態で、冷や冷やものの進行でした。

●ネパール大地震から1ヶ月半、今すぐにでも飛んで行きたい心境ですが、現在の状況をカトマンズ在住の大津昭宣会員からレポートしていただきました。東日本大震災と同様、復興には長い年月がかかるものと思われれます。マナスル以来、大変親しい関係にあるネパール国に対して、我々日本の登山界はどんなサポートができるのか、じっくりと考え、取り組んでいきたいものです。

(節田重彰)

日本山岳会会報 山 841号

2015年(平成27年)6月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 森 武昭
編集人 柏 澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社